



統合失調症の個人面接ガイドブック

池淵恵美 著  
 金剛出版  
 2023年6月 208頁  
 本体価格 3,000円+税

本書は、精神障害、特に統合失調症のリハビリテーションのわが国の第一人者の一人である著者が単著で執筆した、統合失調症の個人面接に関するガイドブックである。最近、著者による精神障害リハビリテーションの入門書を本欄で紹介した(125巻9号)。本書は出版社は異なるものの、その続編に相当するようなものである。

構成としては、第1章 基本となる考え方、第2章 初診時や初診後間もない頃の面接、第3章 外来で急性期を乗り切る、第4章 入院時の面接、第5章 リハビリテーション期の面接—社会参加を目指して、第6章 維持期の面接、第7章 面接で困難を感じる場合の7章で構成されている。各章は、6~12の節で構成され、各節は第1章の一部を除き、2~4ページと簡潔にまとめられている。章末には「個人面接の背景」や「ある日の面接」が、4ページ程度のコラム形式で掲載されている。内容は、初診からリハビリテーション期、維持期にわたり、外来や入院などで頻繁に遭遇するさまざまなシチュエーションについて具体的にわかりやすく説明されている。文体は柔らかく、具体的な模擬事例も豊富に含む。すべて縦書きで、図表はまったくなく、発行2ヵ月後には単行本より安価な電子書籍も発売されている。電子書籍を購入しスマホやタブレットで関心のある節やコラムから読み進めたり、読み上げ機能で耳読もできる。統合失調症は疾患異種性の高い疾患で、多様な支援者のかかわりが必要になるが、さまざまなバックグラウンドをもつ支援者に有用な内容が、時代のニーズに応じた読みやすい形式で提供されており、著者の臨床における配慮の深さをイメージさせられる。

本書のタイトルは、同じ出版社から30年弱前に発行された生活臨床の流れをくむ宮内勝先生による『分裂病と個人面接—生活臨床の新しい展開—』という個人面接の指南書を想起させる。実際、この指南書は本書の最終章の第1節でも引用されており、第1章の最初のコラムでは、生活臨床の発展について説明がなされている。著者自身が述べているように、著者の面接技法の基盤は、生活臨床や認知行動療法、社会生活スキルトレーニング(SST)などである。統合失調症に限らず、精神疾患の支援は、生物・心理・社会的(bio-psycho-social)なさまざまなアプローチを統合して行う必要がある。本書では、実際の日常生活を営む面接室外の暮らしを「リアルワールド」、個人面接を行う面接室のなかを「アナザーワールド」として、リアルワールドの暮らしが充実し、当事者の自尊心や満足感が増して自分の望む人生へと歩みを進められるように、アナザーワールドで、どのように著者がさまざまなアプローチを統合して対応してきたかが、わかりやすく書かれている。

評者は、発達障害や児童精神医学を主な専門領域としている精神科医である。子どもの心の診療にかかわる医師には小児科を基盤とする医師と精神科を基盤とする医師に分けられるが、小児科を基盤とする医師が、母子保健や学校保健などポピュレーションアプローチにかかわることが多いのに対し、精神科を基盤とする医師は家族の精神障害や併存障害としての精神障害の対応を求められ、よりハイリスクの事例を当事者だけでなく家族全体の対応まで含めてかかわることも多い。本書では当事者だけでなく家族や多職種協働チームとのかかわりなどにも触れており、その過程で、時折著者自身の自己開示も垣間見える。ライフステージをとおした支援は発達障害だけでなく精神障害においても必要である。自分自身の得意な領域と苦手な領域を知りつつ、さまざまな領域の支援者と協力し合い、当事者や家族、そして地域を支えていくことが求められる。多職種多領域と連携して支援するためには、疾患の支援法に関する共通の理解が必要になる。本書は、そのような共通理解を獲得することに貢献すると考えられ、さまざまな立場の支援者に手にとっていただきたい。

(高橋秀俊)